

# 高梨良夫著『エマソンの思想の形成と展開 —— 朱子の教義との比較的考察』

(金星堂、2011年)

水野達朗

## 1

エマソンは明治・大正期の日本で、広くまた熱心に読まれていた。現在では想像し難いこの「エマソン現象」がなぜ生じたのかということは、日米文化交流史において重要な問題であるだけでなく、日本における近代文学の成立過程を正確に理解し、更にはエマソンの思想自体に備わる射程を考えるうえでも、看過できない事柄と思われる。本書は、中村正直、北村透谷、山路愛山、岩野泡鳴らのエマソン受容を直接に論じるのではなく、エマソンが流行した背景には、彼らがエマソンの中に、当時の教養を構成した朱子や王陽明らの「新儒学」と同質の思想を見出していた事実があるとの見地から、「新儒学」特に朱子とエマソンとの類似性及び相違点を詳細に対比検証する。この作業を通して、「エマソンの著作が何故熱心に読まれたのか、そしてそれと同時に何故日本人のエマソン理解が一面的になる傾向がみられ、複雑で多面的な思想の全体像が十分には解明されてこなかったのか」(8頁)を示し、ひいては、「新儒学」との類比からエマソンを捉える者が見落とした、エマソンの「複雑で多面的な思想の全体像」自体をも明らかにしようとする点に本書の眼目がある。

## 2

本書は、序章「エマソンと新儒教」、第1章「自己の探求と表現」、第2章「宇宙自然と人間倫理」、第3章「世界の根源的原理と生成」の各章から構成される。

序章「エマソンと新儒教」では、なぜエマソンと「新儒教」とを比較考察しなければならないのか、そのことにどのような意味があるのか、という本研究の前提となる問題が考察されている。序章とはいえ、質量ともに他の章と拮抗している。

著者によれば、エマソンと東洋思想との関係を論じた従来の研究では、儒教の受容に関しては専ら、孔子や孟子の影響という形で取り上げられており、朱子や王陽明などの「新儒教」との関わりが問題とされたことはない。しかしエマソンが受容したのは、儒教の中でも「礼」の教義を軸とする「五経」ではなく、「四書」特に『中庸』の形而上学的な世界観であり、儒教の中核として「四書」を重視した「新儒教」との関係が想定できるし、エマソンが参照した英訳書も朱子の注釈に基づく(第1節「東洋思想とエマソン」)。唐代までの儒教は「五経」を中心としていたところ、朱子が『礼記』から『大学』と『中庸』を独立させて独自の解釈を加え、『論語』、『孟子』とともに「四書」として尊重したため、宋以降は「四書」が儒教の中心とされていた(第2節「新儒教の形成と展開」)。

エマソンと新儒教とを比較すべき理由としては、明治・大正期の日本の文学者が、「新儒教」特に王陽明との類比によりエマソンを理解していたことも挙げられる。中村正直、岩野泡鳴、山路愛山、高安月郊の事例を通して著者は、神が自己の心に「内在」というエマソンの教説と、王陽明の「心即理」との類似に着目した日本の文人が、エマソンにおける「『内在』すると同時に『超越』する神というダイナミックな二重構造」を見落としていたことを指摘する（第3節「明治・大正期の日本人からみたエマソンの思想と新儒教との類似性」）。そして宇宙の根源に「理」を想定し、これを自己の内面において把握していく志向におけるエマソンと「新儒教」との類似（及び相違）を、王陽明から朱子にまで遡り比較検討することを、本書の課題として提示するのである（第4節「新儒教とエマソン」）。

第1章「自己の探求と実現」では、牧師時代のエマソンの説教などを検討しながら、エマソンの思想形成期における「自己」の問題に関し、朱子との比較考察を展開する。

著者はまず、『エマソン説教全集』刊行の意義を強調し、ここに収録された草稿を利用したロビンソンらの研究に言及したうえで、説教テキストの読解を進める。そして、牧師時代のエマソンの関心が主に、牧師の「牧者」としての側面ではなく「説教者」としての側面に向けられており、ゆえに同じく「雄弁家」である「講演者」への転進が容易に行われたことを示す（第1節「牧師から講演者へ」）。人間の道徳的完成を重視するユニテリアニズム等の影響下、エマソンはイエスの絶対性を否定し、単に人間の道徳的理想の体現者と見なした。全ての人間は道徳的修養を積むことで、イエスと同等の理想的な人格（「偉人」）になれると説いたのである。著者によれば、エマソンのこの「偉人」像は、朱子学において儒教の「聖人」像が「徹底的に内面的に定義」されたことと対応する。朱子も聖人を特定の人格ではなく道徳的規範の体現者と見なし、道徳的修養を通して「聖人」の域に達する道を示した点で、エマソンと同じ方向をめざしたわけである（第2節「『聖人』と『学者』」）。

とすると「自己」には、理想的な人格としての側面と、単なる自己としての側面とが重なることになる。この「自己の二重性」という点でも、著者はエマソンと朱子との間に類似を見出している。即ち朱子が人間の心は、天理を存した「道心」と人欲にとらわれた「人心」との複合体であると考えたことは、エマソンが内面的・本源的な「自己」と、外面的・皮相的な「自己」との葛藤を問題にしたことと符合する。但しエマソンの場合、二つの「自己」が二元的な対立関係に置かれ、最終的には本来の「自己」が皮相の「自己」を克服するとされる点、朱子の人間観における並存の関係とは異なると著者は見る（第3節「『心』と『魂』」）。また著者によれば、エマソンも朱子も人間の主体的な努力を重視するが、エマソンの場合、自己を信頼することはそのまま、自己の内なる神に帰依することをも意味するのに対し、朱子の教説においては、人間の意志はあくまでも人間界のものに過ぎず、最終的には天に身を委ねるしかないとされる点が異なる（第4節「『克己復礼』と『自己信頼』」）。

第2章「宇宙自然と人間倫理」では、エマソンと朱子との両者において、自己の道徳的向上をめざす志向が、宇宙の包括的原理の探求と連動していく機制について考察を進める。

朱子の教説では、人間の心に内在する理としての「性」と、事物の「理」とは連続して

いとされる。エマソンも精神の法則と、自然の法則とは照応すると説く。このように自然の事物から出発して、形而上的な法則を探求するという姿勢は両者に共通する。但しエマソンが言葉は直接、事物の本質を示すと考えたのに対し、朱子は言葉を、事物の形式的側面を示す「名」と見なす（第1節「『格物致知』と『照応』」）。またエマソンは、人間の内部の「道徳的情感」を通して、初めて宇宙の「道徳の法」が顕現すると考えたが、朱子は天地万物の「理」自体に道徳的完全性が内在し、人間の道徳心は悪を防ぐ消極的な機能を有するに過ぎないとした。即ち、エマソンの方が人間の主体的な努力を重視していると言える（第2節「『敬』と『道徳的情感』」）。宇宙を司る道徳的な理法の下、自己の道徳的修養をめざす態度は共通だが、朱子の理法が既に完成した「道」であるのに対し、エマソンの理法は完全性をめざす「過程」そのものなのである（第3節「『道』と『道徳の法』」）。

エマソンは妻エレンの死などを契機に、来世における因果応報を信じる「靈魂不滅」の教義を捨て、現世において善悪両極の間に絶えず働く「償い」の法則を説いた。朱子もまた来世ではなく現世における、陰陽両極間の応報の思想を展開しており、ここに両者の現世を中心とした人間倫理観、ひいては人間中心的傾向を認めることができるという。しかしここでも著者は両者の違いに意識的であり、「朱子の陰陽が無限に循環運動を続行するのに対して、エマソンの極性においては、矛盾、対立する二極の間の相互の抗争と否定を通じての自己克服」があると指摘する（第4節「『福善禍淫』と『償い』」）。エマソンは更に応報の法則を通じ、現実社会が理想状態に向け進化するというビジョンを描いた。この点は朱子の社会改革の志向とも共振するが、エマソンが新たな社会制度の構築を想定していたのに対し、朱子は既にある完全な秩序の再発見をめざしており、あるべき社会性と現存する規範との関係という点で、両者は見解を異にしていた（第5節「『平天下』と『平和』」）。

第3章「世界の根源的原理と生成」では、存在論の見地から、世界の根源に想定される超越的な存在や、世界の創造と生成をめぐる、エマソンと朱子の思考を比較考察する。

著者によれば、エマソンと朱子はともに超越的、究極的な絶対者を、人格的な神や「上帝」ではなく普遍的、道徳的な「理法」或いは「原理」として捉え、人間の道徳的な秩序と宇宙自然の運行を司る原理との、双方に適用できる思想を構築しようとした。しかも古来からの人格的な超越者の教義を完全に捨て去ることはなく、人格性の含意を残している点においても両者は同じであるという（第1節「『天理』と『普遍的統一者』」）。カントの哲学をコールリッジを介して受容したエマソンにおいて、超越的なものの認識には与らないカントの「理性」は、根源的な理法、原理を直接に把握する機能としての「理性」に変貌している。ここに、宇宙を貫く根源的理法としての「理」が、個別の存在に「性」として付与されていると説く朱子との符合が生じると著者は見る。と同時に著者はやはり、万物に内在する性質である朱子の「性」と異なり、エマソンの「理性」は人間のみならず賦与された積極的、能動的な機能であると、両者の相違点をも指摘する（第2節「『理』と『理性』」）。

そして著者はいよいよエマソンの「神」概念に切り込んでいく。エマソンの Over-soul とは個別の soul に内在しながらも、これを超越していく神である。内在すると同時に超越する二重構造という点では、朱子の「太極」が、個物に内在する「各具太極」と万物を統括する「統体太極」との、両側面を兼ね備えているのと同じである。このように整理

したうえで著者は、個別の soul を克服して Over-soul に同化していくプロセスとしてのエマソンの「修養」を、人欲を去り自己の本然を発揮する朱子学の「人の道」と重ね合わせる（第3節「『太極』と『大霊』」）。またエマソンは、神による世界の創造というキリスト教の教義からも逸脱し、世界は神が「顕現」したものだと言った。ここに、絶対の造物主という観念が存在せず、万物は「気」により「生生」として見る東洋思想との接点が生じるものの、エマソンの場合、神はあくまでも人間の soul を介してのみ顕現し、万物とは直接に結びつかない点異なる、と著者は論じる（第4節「『生生』と『顕現』」）。

### 3

以上に見てきたように、本書の内容は、①エマソンの思想の形成と展開に関して精細な記述を行い、②朱子との対比検証を通してその特質を浮き彫りにし、③明治・大正期の日本でエマソンが広く受容された理由を明らかにする、という三層構造を成していることがわかる。こうした複合的な構成を採用している点に、本書の最大の特徴がある。

本書はまず、エマソン自体に関する包括的な研究書としての内実を備えている。日本ではこれまで、エマソンについてひととおりの知識を得ようという場合には、齋藤光『エマソン』（研究社、1957年）が参照されていたと思われる。この書は、エマソンについての重要な事項をバランスよく記載し、専門的な深い理解をも随所に示した名著と言える。しかしアメリカではその後、70年代と80年代に Emerson Revival、Emerson Explosion などと呼ばれる圧倒的な研究の隆盛が見られ（アメリカにおけるエマソン研究熱は、日本における夏目漱石や宮沢賢治の場合を想起させるものがある）、エマソンに関する知見もかなり更新されてきた面がある。その意味で、アメリカのエマソン熱と、日本の読書界における関心の低さとの間には大きな断層が存在しているのである。近年では、市村尚久『エマソンとその時代』（玉川大学出版部、1994年）もあるが、これは専ら教育学、教育思想の観点からのもので、しかも必ずしも70年代や80年代のアメリカの研究動向を反映していない。

勿論、日本でも学術雑誌や紀要を中心に、アメリカにおける研究の進展に呼応した研究は着々と進められてきたが、それをまとめた形で専門外の読者、研究者に示す書物が存在せず、包括的なエマソン研究書の刊行が望まれていた。本書はその点、朱子との比較を主題とするものの、近年、アメリカのエマソン研究で提示されてきた論点をも目配りよく取り込みながら、エマソンの思想の核心に迫る充実した論述を展開しており、エマソンを総合的に理解するための確かな指針を提供する書物と言える。ウィッチャーをはじめとする古典的なエマソン研究では、『自然』と『第1論文集』とに示された唯心的な「超絶主義」にエマソンの神髄を見、そこから『第2論文集』の「経験」以降、現実的傾向に転回していくプロセスを跡付けるといった形が採られていた。これに対し近年の研究はまず、文体や表現様式に内在するダイナミズムに注目し、エマソンのテキストでは常に「超越的」傾向と「現実的」傾向とが拮抗し葛藤していることを重視する。そして、説教全集の刊行などを受けて牧師時代のエマソンの言説を精査し、ユニテリアニズムと「超絶主義」との連続性を明らかにするとともに、その延長線上で後期の社会的な発言にも光を当てる。本書はこうした研究動向を、先に見たような「二重構造」の指摘や、牧師時代の説教の検討



などに鋭く反映させており、全体として近年のアメリカの研究に拮抗するだけの質量を備えている。

とはいえ本書には、『自然』の頃は「唯心論」的な思想を抱いていたエマソンが、「事物が心の外に客観的に存在」するとの認識が変わるといふ、ウィッチャー的な見方を採用した記述もある。勿論、著者は同時に、「青年期のエマソンもまた…こうした考え方（事物が実在するとの考え方）も抱いていた」と記し、『『内在』すると同時に『超越』する』ダイナミズムにも言及する（58-60頁）。ただ、時系列的な「思想の展開」という観点と、全ての時期を貫く「二重構造」という観点とをどのように組み合わせるべきかということ、本書の読者が今後も考えていくべき、エマソン理解の難問として残されていると言えるだろう。

次に本書はまた、エマソンと朱子との詳細な対比研究でもある。比較文学研究では、直接的な影響関係の調査ではなく、誰と誰という形で単に比較する研究は「対比研究」と呼ばれている。「対比研究」は、なぜこの両者を比較するのか、どのような観点から比較すればよいのかを明確に示すことが難しく、漠然と「ここが似ている」、「ここが違う」という話になりがちで、ゆえに忌避されることも多い。これに対し本書では、明治・大正期の日本の知識人たちは、自分が親しんでいた新儒教との類比からエマソンを理解したという歴史的な事実を踏まえた上で、そのことの意味を探るための作業として、詳細な対比研究を位置付けることで、エマソンと朱子とを比較する理由を明確にしている。また具体的な比較検討の作業自体においても、単に個別的な事項を並べて比べるのではなく、エマソンの論理が「精神と自然との間の二元的対立関係」（112頁）を前提とし、「キリスト教の『創造』観に立脚」（239頁）していることに留意するなど、両者の間の本質的な違いを生み出している構造的な背景を浮き彫りにするような論述方法を用いていると言える。このように本書は、「対比研究」の陥りやすい陥穽を周到に回避し、エマソンと朱子との比較から何が見えてきて、そのことにどんな意味があるのかを明晰に提示しようとしている。

勿論、個別には比較の仕方について議論の余地を残す部分もなくはない。例えば、「自己信頼」で「正しいものは私の本性にしたがっているものだけであり、不正なものは私の本性にさからっているものだけだ」という時の「本性」を「道徳的情感」と捉え、朱子における「義」や「敬」と比較した部分がある（142頁）が、この「本性」もやはり、単なる私の本性と道徳的本性との「二重構造」を内包しており、そのことが「自己信頼」の記述に矛盾葛藤をはらんだダイナミズムをもたらしていると私には思われる。ただ、エマソンの言葉と朱子の言葉とが等置されることで、改めて両者の間の異和に気付かされるという体験もまた本書を読む楽しみであり、ある意味では、このような異和と親和との間の往復作業というものは、当の著者自身が本書全体を通して実践している方法であるともいえる。

最後に本書は、朱子とエマソンとの比較考察を通して、日本においてエマソンが広く受容された理由や、その理解に偏りが生じた背景を明らかにしようとする点で、外国文学の影響と受容を問題にする、狭義の比較文学研究にも寄与するものである。特に、エマソンは東洋思想と似ていたから受容されたという側面だけでなく、そのように受容されたがゆえにエマソンの異質性の部分が見落とされたという側面をも明らかにしている点が本書の特質であると思われる。亀井俊介氏は『近代文学におけるホイットマンの運命』で、比較

文学研究は異なる国の文学を繋ぐ「橋」の研究であると同時に、橋がかかる「兩岸」の文学自体の研究でもあるべきだと説かれた。実際に「橋」の研究と「兩岸」の研究とを繋ぐことは難しいが、本書ではそのことがさりげなく実現されている。即ち、直接的に影響関係を論じるのではなく、精細に「兩岸」の様相を対比することを通して、そこに「橋」がかかることの意味を間接的に浮かび上がらせているのが本書なのだと思う。

このように「遠くから」攻めるのが本書の方法であるとすれば、逆に徹底的に「近くから」攻める行き方も可能だろう。ある種の比較文学の論文に覚える物足りなさは、遠くからの眺望がきいているわけではなく、しかも「橋」がかかる工事現場の様子が見えるほどには接近していないという中途半端な距離感から来ると思われる。であれば、本書のように思い切り「遠くから」眺める行き方が有効であるのと同様に、思い切り接近して、異質なものが接触する現場のダイナミズムを「近くから」微視的に記述する行き方も、比較文学研究をより意味あるものにするうえで有効だろう。例えば、日本の文学者がエマソンのテキストと格闘した翻訳の現場を詳細に分析することにより、日本の文学者は本当に著者が言う通り、エマソンの異質性の部分を看過していたのか検証することもできると思う。

本稿で見てきた通り、エマソン研究、対比研究、狭義の比較文学研究を有機的に結合して文芸交流の大きなビジョンを提示した本書は、日本におけるエマソン理解を前に進めるうえで非常に有意義な書物であり、本書が投げかける問題を読者がそれぞれに咀嚼することを通して、エマソンをめぐる日本の知的風景を更新していくことが必要になるだろう。